

## 社会が選択する感染症

長崎大学熱帯医学研究所

国際保健学分野教授 山本 太郎

エイズウイルスがヒト社会で足場の確保に成功する。1920年代初頭のことであった。今から考えても偶然に過ぎなかった。しかし偶然の確率を高め、その後の感染流行を確かなものにしたのは、まさに当時の社会のあり方だった。欧米による植民地経営と近代医学の植民地への導入がその道を拓いた。

欧米の植民地経営は、鉄道や港湾の建設を通して、都市に男性労働者を集積し、そこで暮らす人々の男女比を極端に歪なものとした（1910年のレオポルドヴィルにおける成年の男女比は10対1であった）。それが都市における売春と性産業の隆盛をもたらした。

近代医学の導入は、当時アフリカで風土病的に流行していた眠り病やイチゴ腫、梅毒の治療を可能にした。治療薬には砒素系化合物が用いられ、大規模な注射が大陸全体で繰り返された。薬物投与は、効果を確実にするために、数回にわたって行われた。注射器と針は使い回された。残る資料によれば、1917年から19年にかけて、ザイール（現コンゴ民主共和国）で熱帯病対策に従事した診療班は、18ヶ月の間に、89,743人を診察し、5,347人の患者を発見し治療したという。装備は3台の顕微鏡と6本の注射器しかなかった。

介入は効果的で、新規感染率は減少した。計画は全国規模で実施に移された。1941年、仏領アフリカで使用された砒素系治療薬の総量は、約40万バイアルにも上った。一バイアルあたり数回の投与が可能であることからすれば、全土で数百万回の皮下注射、あるいは静脈注射が行われたことになる。こうした状況が、たった一人のエイズ患者からのウイルス拡散を可能にした。ウイルスは、熱帯病対策の一環としての感染症治療と、性産業を格好の土壌として拡大した。結果、20世紀後半以降、エイズは汎世界的流行し、6,000万人を超える感染者と3,000万人近い死亡者を出す。

最初の感染がそれ以前の社会で起こっていたとすれば、どうだったろう。植民以前のアフリカ社会であれば……。歪な性比がもたらす売春はなく、注射器や針の使用もなかった。ウイルスが、チンパンジーからヒトに感染したとしても、それは、流行の袋小路に入り

込み、やがて社会から消えて行ったはずである。

1918年に流行したスペイン風邪も例外ではない。最初の流行が始まったのはアメリカ東海岸だった。

1918年といえば、第一次世界大戦末期で、アメリカがヨーロッパ戦線への参戦を決めた年だった。若い兵士は大西洋を渡り、西部戦線へと向かった。船は込み合い、兵舎や塹壕で、多くの兵士が密集した。それがウイルスの拡大に寄与した。一方、世界的に見れば、第一次世界大戦は、人や物資を、植民地を巻き込んで動員して戦った、初めての世界的大戦であった。増大する物流や、動員を含めたヒトの移動が、それまでにない速さで流行を広めた。早い流行速度が病原性を高め、高い致死率をもたらした可能性は高い。もし、スペイン風邪の流行が、世界大戦でない時に起こっていたとすれば、どうなっていただろう。流行は、やがてパンデミックに至ったとしても、それに至る時間はもう少し緩く、感染は穏やかだった可能性は高い。

なぜ、ある感染症が流行するのか。これまで私たち研究者は、その原因を一生懸命に考えてきた。しかし、どうやらその考え方は「逆」ではないかと思いはじめている。流行する病原体を選び、パンデミックを性格付けるのは大きく「ヒト社会のあり方」ではないかと。古くは、中世ヨーロッパの十字軍や民族移動によってもたらされたハンセン病。18世紀産業革命が引き起こした環境悪化が広げた結核。世界大戦という状況下で流行したインフルエンザや植民地主義と近代医学の導入がもたらしたエイズについては述べた。その意味では、今回の新型コロナウイルス感染症や未だアフリカを中心に流行収束が見られないエボラ出血熱も例外でない。ヒトの行き来により格段に狭くなった世界。野生動物が暮らす生態系への、私たち人間のとめどない進出。温暖化による野生動物の生息域の縮小。そうしたことが新たな感染症の流行と拡大をもたらした。

感染症は社会のあり方がその様相を規定し、流行した感染症は時に社会変革の先駆けとなる。そうした意味で、感染症の汎流行はきわめて社会的なものとなる。

歴史が示す一つの教訓かもしれない。🐼